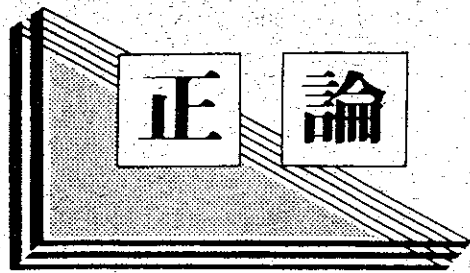


受験機会複数化と足切り

今年の国立大学の入試では、十万人も足切りが出た、三五%も水増しして発表を行ったが、定員には一万人も足りなかつた。A、Bの区分が不適切であった、などなど、数多くの問題が残ってしまった。国大協は来年の改善案をまとめた。東大の属するBに偏り、法学部ではその比率が二対一にもなつて、文部当局はもとより、政界からも再考を求められている。



教審は、その第一次答申で、先ず、大学入試の改革を採り上げ、「受験競争の弊害を是正するために、各大学はそれぞれ自由に個性的な入学選抜を行うよう」要請し、偏差値の偏重と受験競争の過熱を是正しようとした。

その結果、本年から国立大学は、共通一次の試験科目を五科目に削減し、A、B両グループに分かれて、受験機会の複数化を行った。しかし、「新入試は失敗」との不利な評を受けている。

この受験機会の複数化は、その発表の当

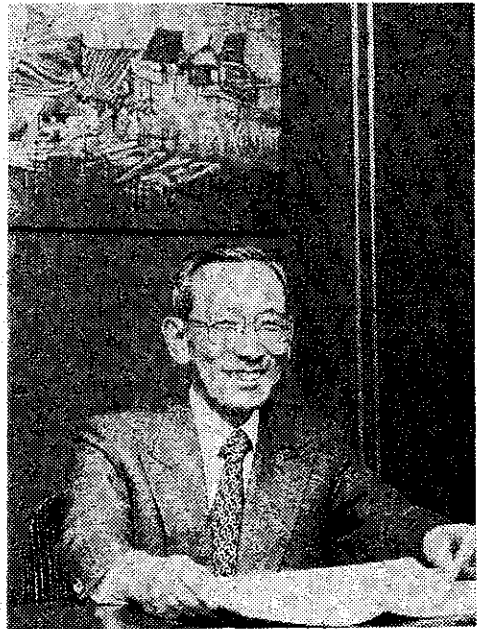
時、試験科目の削減、選択科目の増加とともに、選択の自由や個性重視の原則に沿い、偏差値体制の打破ともなつて、受験競争の緩和をたのむが如くに受け取られた。マスコミもこの改革を支持し、その成

誰のための入試改革なのか

個性重視に矛盾する現行制度

ほぼ三十余万人の受験生があつた。その競争倍率は実質三・三倍程度であつたが、二度受験出来るようになれば、当然、表面上の受験者数は倍増する。現に今春は、延べ六十五万人の受験生があり、平均の競争倍率が六・三倍、倍率の二十倍を超える所が、八学部も出てきたと伝えられている。

日本学術振興会理事長 木田 宏



数受験によつて、偏差値上位者が入学し易くなる。この効果が、序列制を二層構造にしていく。私大の偏差値による序列化をみれば、このことは明らかである。

全大学の入試二回実施案

昨年から繰返された種々な論議は、大学、高校、受験生、父兄、また、偏差値の高い者、中程度の者は、それぞれ立場からすれば、その主張は、合理的である。大学の受験制度をめぐつての議論は、今日改めて議論が失われてしまつてしまつた。

うごも避けられない。手厚い入試を行おうとすれば、受験者の倍率を三倍程度に下げなければならない。十万人の足切りが出て、やむを得ない仕儀であると言わなければならない。

でも、その数だけ繰り上げの措置を取り、各大学間にこのことが行われて、偏差値による大学の「序列化に拍車」がかつたとしても、報せられたのである。

果を期待したのである。しかし、これらの方針は、それ自体に矛盾する要素を含んでいる。例えば受験機会の複数化である。

列年、国立大学十万人の定員に對して

「二」だが、それが現実とすると、足切りの反対の声が高くなって来る。足切りを少なくして、受験者が多くなれば、画一的な点数処理によつて、機械的に合否を決めていく外はない。即ち、偏差値への依存を高め、個性重視の方針とは反対の方向に進むことになつたのである。

その大学の序列化は、共通一次の導入によつて進んだと言われている。したがって、この入試改革の明確な必要がある。